

2021 June

6月号

春燈



安住敦の句

釣堀の釣れても釣れなくても親子

『柿の木坂雑唱以後』平成二年

釣りをする親子。休日二人で来たのだろう。親子水
入らずの情景が浮かぶ。

私自身もこの釣堀に行ったことがある。住宅地の真ん
中に突如現れる幟。道行く人を誘い込む。そこを覗くと
喧騒とは無縁の、のんびりした時間があった。親子連れ
は何組かいた。このうち釣れたのはどの位だろうか。
ふと先師万太郎の戯曲「釣堀にて」が頭を過った。

金山雅江

安住敦の句

夕爾の花菜夕爾の雲雀そこに夕爾

『午前午後』昭和四十七年

自註によれば、広島の句会の帰途、独りで福山の夕爾
の生家を訪れた折りの一句。敦師は、菜の花が咲き誇り
雲雀も揚がる景に夕爾が立っていることに感動を覚えた。
春燈草創期以来、夕爾とは敬愛の中で、代表作家として
支え合った。夕爾亡き後、師は多くの追慕の句を残し、
特に本句は夕爾のリフレインと季語を絶妙に配し、想い
の深さを伝えているのである。

山下健治

安立公彦



清明や水の流れもリズム得て

星ひとつ煌めくみ空啄木忌

手折りたき夜桜明日は散りゆくか

しばらくは落花の中に身を正す

貝寄風や銚子に跳る大漁旗

燈下集

○ 木村梨花

羽根枕しつかり抱いて朝寝かな

一村は機織る暮し桃の花

春愁笑うても出る涙かな

鳥帰るやさしきことを言はれけり

真つ白な連絡船や風光る

○ 溝越教子

野あそびの園児の笑ひ引き込まる

ときをりはA型気質黄水仙

とほき日は母を離れず蕨摘

啓蟄や俄にふゆる雀どち

亀鳴くや「オンリーユー」をひとりの夜

○ 齋藤晴夫

名草の芽大地を抜くる真昼かな

天地有情ものみな潤み春時雨

ランドセル幸せ詰めて入学す

春眠や肩の荷一つずつ下ろし

忘却は古いへの恵み花の雨



○ 川崎真樹子

わきまへぬ女で通し雛飾る

ドーナツの穴春寒の味かとも

春禽の涙のやうに産む卵

目刺焼く気負はずされど気は抜かず

失言はさだめし本音四月馬鹿

○ 河崎 國代

如月や夫の忌日も飛ばしゆく
高層よりうき世の春を鷺掴み
青春の続編つむぎ青き踏む
諸葛菜のむらさき煙る風の径
別れ霜かたみ整理の難しかりき

○ 上野 進

疑ふは人の世の常落椿
縛られてより御神体杉の花
おんぼろろ毛を筆り合ふ猫の恣
手を振れば手が足誘ふ桜坂
峡の児の写生夏空細長く

○ 石橋 邦子

慶喜の墓所は終日散るさくら (十代将軍)
芋植ゑてあと追ふ雨となりけり
花曇一茶も歩きし守谷まで
西行忌われに貧しきうたごころ
妹が手折りてくるるライラック

○ 河本由紀子

結婚記念日の夜半の旅立ち冴返る
春の雲時疫の騒ぎ知らぬげに
三月十日戦禍の魂に祈りけり
滅入る気をならじと背に春の雷
添ひゆくも別るるさだめ花筏

○ 永井 恵子

春雪の遠嶺見するや霧島山
三月十一日黙禱サイレン遠く聴く
うぐひすを出しなに聞くや雨催
一つだに苔残さぬ桜かな
惜春の成犬主をひつぱれり

○ 荒井ハルエ

放課後の校長先生飾る雛
白木蓮三月十日の白尽くす
天に星地に再びの芽吹きかな (東日本大震災)
春風や足並み揃へ鼓笛隊
椿落つ明るき日差しある方へ

○ 石田 康明

木挽町の春南北作の「桜姫」
永田町のとある公邸竹の秋
高三の自ら選び取りし春 (受験合格)
悔しさを胸底に秘め鳥帰る
惜春やロシア土産の赤い靴

○ 宮崎 洋

せつかちの女や春をたとふれば
春寒の男の拾ふシーグラス
オクラホマミキサー春風と手をつなぐ
ゆふやみに炎となりぬ落椿
小指立て左手の目刺右手の猪口

○ 持田 信子

保育児の公園デビュー木の芽風
花ミモザ風にあはせて舞ふ園児
少年のひとりドリブル辛夷咲く
慎重に一步踏み出す猫の恋
さざなみや未知の旅へと花筏

○ 平沢 恵子

警官の訪問調査涅槃西風
米を研ぐ彼岸の水でありにけり
図書館の閲覧休止鳥雲に
母を待つ子やぶらんこに浅くぬて
チューリップいつより夫に反論を

○ 中里 よし子

昨夜の雨吸ひ尽くしてや冬木の芽
街路樹の白蓮瑕瑾なかりけり
友の忌が近し燃えたつ牡丹の芽
詮なきことに心乱して春逝かす
此処に生きる特養七番街囃

○ 木村 みどり

葛溶けばほのと花の香西行忌
錦糸卵綺羅に飾り雛祭
啓蟄や散歩の赤きスニーカー
養花天昨日のことは皆忘れ
歯の痛みまたふりかへす三鬼の忌

○ 大西由美子

背守りの家紋の刺繍上巳かな
たんぼぼや更地の空を独り占め
街路樹の影は揺れねど木の芽風
朧夜や五百羅漢のさざめごと
逢ふはずのなき人の影花おぼろ

○ 池上昌子

行き交ふ人の皆立ち止まる八重樫
露の臺てんぷらにして夕餉かな
病み抜けて朝の散歩や青き踏む
暖かや公園賑はふ久々に
カフェテラスの金平糖酒風光る

○ 近藤真啓

どの子にも秘密はあらむ石鹼玉
烏曇独りのときは歌ふべし
十年を任めば故郷つばくらめ
家系図に下戸の連なる彼岸かな
今日もまたいつもの歩幅朝桜

○ 山下健治

寧日やシネマ通りのミモザ咲く
初蝶の一詩もたらし宙に消ゆ
多摩川の河口かげろふ独りの歩
置き去りの玩具の砂場鳥雲に
春宵や時止まりある時計塔

○ 小林紫乃

誕生の子牛の背や風光る
河津桜長き睡の子牛かな
ものの芽や境界線を憚らず
木々芽吹く双子のせたる乳母車
久に訪ふ山中湖畔木の芽時

○ 山下朝香

芹摘めば濁る小川や夫の里
山椒の芽京の女の見せぬ意地
花便り紙飛行機の臨時便
初桜ひとり占めする誕生日
納税の申告すまし花の冷

○ 田中嘉信

武骨なる枝の先々梅ふふむ
紅梅の地を這うてなほ生きんとす
緩やかに尾びれ振る鯉水温む
如月や水天宮の若夫婦
行灯の連なる街や春シヨール

○ 山浦紀子

青竹にちひさき雛や安房の国
プランターあふるる香り菜の花黄
重なりてふくらむ絵馬や春日差
肌すべるハニーソープや春の宵
愛犬の面ざし偲ぶ花万朶

○ 室井津与志

三密の自粛のマスク独り言
葺替への江戸の家並を聖火往く
除染土を遠目に春野聖火継ぐ
フクシマの復興五輪の亀鳴けり
コロナ禍の夜も密なる桜かな

○ 中上馥子

老いの歯にほると碎けり雛あられ
麗かや拳玉の音リズミカル
不意打ちの真夜の春雷夢碎く
強東風や個食黙食慣らされて
寺町に法鼓ひびくや入彼岸

○ 佐保まさを

闇焦がす焰の渦や修二会闌く
何とはなく墓のことなど木瓜の花
振り返り合はせる歩幅二輪草
菜畑に屈む人影春の昼
田楽や厚き織部は祖母譲り

余言 安立公彦

そらみつ大和高々と初雲雀

西川 保子

「そらみつ」は、「やまと」にかかる枕詞。この枕詞の四音があって、この句の「大和」は生きてくる。辞書は、「昔の歌文に見られる修辞法」と、用途を述べている。

この句の「そらみつ」は、「大和」と呼応して「高々と初雲雀」をみごとに映し出している。雲雀は季節が来ると、日本各地の草原や畑地に巣を作り、高だかと舞い上がり囀る。鶯とはまた違った鳴き声で、牧歌的な趣のする声である。広々とした大和の空が連想される句だ。

髪短く切るや春愁捨つるべく

中野あぐり

この句の見所は、「春愁捨つるべく」だ。「春愁」は春の物思い、春の哀愁、何となく心がふさぐ思い、などを言う季語である。この季語はむしろ実感よりも、俳句という十七文字の短詩の中で活かされている。

作者は今、鏡を見ながら、伸びた頭髪を切るべく美容院に行こうと思っている。伸びた髪の毛と春愁との関わりは、

的な暖かさでなく、作者の心に呼びかけるあたたかさなのである。鑑賞の到り着く思いの句と言えよう。

大川の夕日の綺羅や鳥帰る

木多芙美子

この「大川」は、隅田川の吾妻橋附近から下流を指す、と辞書は記す。詩歌小説に多く取り上げられている。

今、その大川の橋の袂に佇ち、折から北方に帰る渡り鳥の群れを見送る作者。俳人にとつては殊に馴染の深い季語である。鳥帰る、鳥雲に入る、帰る鳥ほか、歳時記には一茶の句も在る。夕空に浮かぶ「鳥帰る」の景は、殊に句どころをそそる。この句、「夕日の綺羅」が、大川にも鳥帰るにも、佳く調和して景を飾っている。

嫁ぐ姉を送る妹春の雪

田嶋 洋子

この句を見ていると、雛祭の歌の一節が浮かんで来る。〈お嫁にいらした姉さまに、よく似た官女の白い顔〉。うろ覚えで字句に違いがあるかも知れない。男ばかりの兄弟のわが家では、近所の女の子が歌っていたこの歌が、新鮮に聞こえて来るのだった。小学生の頃のことである。

この句はまさにこの歌の通りの実景だ。こういう思いは私には別世界のことだが、俳句として見ると、そこには深い独立性を感じる。嫁ぐということ、姉と妹のそれぞれの

作者のみの思いであるが、こうして形作られた句を見ると、私たちもその句に賛同する。俳句の領域は広い。

戦なき三月十日の川の音

吉澤恵美子

「三月十日」は、東京大空襲の日。七十六年前の昭和二十年のこの日、アメリカのB 29爆撃機三四四機の夜間空襲により、東京は焼土と化す。私は郷里鹿児島島の小学六年生、十一歳を迎えた日だった。市内の大空襲もこの日だった。

今作者はその大空襲の日を思い、隅田川の河岸に佇む。当時の東京は現在のような高層ビルは無く、木造建築を主とする落ち着いた街だったのだ。「戦なき」が活きている。「三月十日」は、人々の心奥から消えないだろう。

仏頭の凛々しき眼あたたかや

三宅 文子

この句の前に、「根津美術館」の前書がある。この句の「仏頭」もその美術館の展示品なのだ。

陳列の像を見ていると、その中の一つの仏像の姿に足が止まる。その凛とした容貌の中で、ことに凛々しい目許に強く惹かれる作者。やがて見入る仏像の、ことに目許から温かい思いの湧いてくるのを感じるのだった。それは身体

思い遣り、そういう姉妹の様子を善く表わしている。

流人めく自肅の暮し莖立ちぬ

久保 久子

「莖立」は、野菜などの豊が伸びて固くなり、食べられなくなることを。「莖が立つ」は比喩として遣われている。

この句、「コロナ禍」の前書を入れると、「自肅」も、「流人めく」も納得されよう。「流人めく」は厳しいが、現実の世界に及ぶ実状である。「自肅の暮し」は良く納得のゆく実景だ。更にコロナ禍の果ての「莖立」は、この疫病の終焉の有り様を見通せない人々の嘆きの言葉と言えよう。一日も早い終焉を願うのは人類の願望である。

初花やふたりのひと日重ねゆく

藤原 若菜

今年の初花は何時だったか。日記には三月二十四日、公園の桜満開と記している。例年より開花は早かった。

作者は病いのため病床に在ったが、今は快方に向かっていくとのこと、喜ばしいことである。同時発表の句に、〈天を向くつぼみ清けき彼岸かな〉の句がある。「天を向く」に快方への調べを感じる。「ふたりのひと日」は、作者と夫君の生活である。「重ねゆく」に、自らの病の快方への思いが出ていて、句を読む人に希望と安堵の思いを与える。快癒も近い。長患いを薬効と為す今後を祈念します。

当月集

安立 公彦選



○ 辻 泰子

梅林の花の遅速を慈しむ
コロナ禍の願かけ春の茅の輪かな
地下足袋の白き行者や幣辛夷
明日開く桜や全山深呼吸
老猫の最終楽章ミモザ咲く

○ 種田 利子

○ 佐藤 まさ子
辛夷咲く大学の門脈はへり
姉妹仲良く写す桃の花
広々と段々畑蝶の昼
空晴れて島の荒波敷椿
追ひかけて追ひかけられて春の夢

○ 山口 地翠

○ 柿原 よし子
医のまこと真心頂く老いの春
庭師の鋏の音を聞きぬる春障子
華やげる菜の花堤長良川
若き日のありし思ひ出肥後すみれ
満開の桜並木の輪中堤

春の香に心休まる庭めぐり (根津美術館)

故郷への旅を夢見る桃の花

三越の獅子のマスクや花ふぶき

大の字に寝て見る空や鳥雲に

人生にも卒業ありや鳥雲に

高架下ふと目にとまる紫木蓮

庭掃除芽吹く楓に見下ろされ

のどけしや猫目を細め樽の上

行儀良く三つ並ぶや落椿

海苔をとる母の手業を目の奥に

春燈の句

安立 公彦選



たんぽぽや道草ばかり半世紀

揚雲雀天上を見て濁世見て

美作路ふるさと訪はば木の芽雨

江戸雛明治雛や宿場町

不条理と繰返しつつ春暮るる

花散るや此の世の事の呆気無く

鎮まりし気のまた尖る木の芽かな

ありのまま生きてゆけよと葱坊主

つやめける乙女の像や春の風

母を待つ祥月命日梅香る

なみの地や仏母のみます摩耶詣

莫高窟の思ひ出のせて黄砂降る

槍草へ嘴を構へる雀かな

入彼岸コロナ猖獗治まらず

なぞりたる誰彼の顔春の星

星空に偲ぶ故郷おぼるなる

兵庫 川端 正紀

京都 村上 國枝

東京 遠藤 レイ

岐阜 高井 修一

春の雲ひとつひとつに詩のあり

女将てふ名を脱ぎて見る山桜

美容院出て春風のやはらかし

菜の花や駅に貼らるる新ダイヤ

彼岸会や哀しき介護日記読む

東の間や春の大虹消えさりぬ

子と孫と墓参の坂道桜咲く

「千の風」ひとり歌ふや春今宵

白木蓮一気に咲いて老いにけり

咲き初めの花や帰りは五分咲きに

花吹雪閉まりしままのレストラン

参道や溝に溢るる花の塵

つばくらめ古墳の里をかすめけり

見上ぐればさくら吹雪やわが壮年

杉花粉泣いて笑うて鼻つまり

翔猿の妙技春場所狂はする

福井 西本 花音

広島 落久保万里

東京 松本ゆきえ

京都 中西 衛